

小峰城ふもとやま話

第十話
白河藩の
正月と食事

新しい一年のはじまり、正月は、現在でも特別な期間として扱われています。食事についても同様で、おせち料理やお雑煮など、正月ならではの食文化があります。

今回は「御食膳御規定」(天理大学附属天理図書館蔵)や「奥州白川風俗問答」(「白河市史 九」所収)などの史料から、藩主や藩士などの正月の食事や文化を紹介します。

《藩主の食事》

藩主の食事を記した史料の正月元日のはじめには「大福梅干入」と記されています。これは「だいふく」ではなく「おおぶく」と読むと考えられます。若水(元旦にくむ水)を使って立てたお茶のことで、新しい年の災いをはらうものだといわれています。

大福茶の後「御高盛」・「二御膳」・「三御膳」の記載があります。

「三御膳」には「御重肴」が含まれており、二重の箱に「数の子」と「酢牛蒡」が、それぞれ詰められていました。それ以外に、二汁五菜の「御祝御膳」が、時間を空けて二度出されるなど、藩主の年始の食事に見合った、非常に豪華なものだった

たようです。

また、雑煮は餅やいちよう切りにした大根、焼き豆腐、青菜、里芋、薄く削ったかつお節が入ったものでした。

《藩士・町人の食事》

藩士は、数の子や田作、牛蒡、煮豆などを重箱に入れた料理を用意しました。

一方、町人は藩士と同じものを食べたようですが、ほとんどの家では重箱に詰めることはせず、一部の裕福な家だけが重箱を用意していました。

また、雑煮は江戸と同様に、餅やすずな、大根、人参などが入ったものを、藩士も町人も食べていたようです。



北尾重政「絵本世都之時」より
若水くみの様子
(国立国会図書館蔵)

文化財課 ☎ 2310

渋沢栄一×松平定信

南湖を彩る系譜

第一回
松平定信を
敬愛した渋沢栄一

日本資本主義の父といわれ、3年後には新一万円札の肖像画になる予定の渋沢栄一が、松平定信をあつく敬愛していたことはあまり知られていません。

白河藩主だった定信は、30歳の天明7年(1787)6月に、老中として江戸に上り、後に寛政の改革と呼ばれる幕政改革を行いました。

その際に、国元の白河を離れることになり、家臣たちに肖像画を遺しました。

これは定信が自ら描いた自画像で、白河を留守にする間、この自画像を定信の分身と思い、今まで通り忠勤に励んでほしいという願いが込められています。

この逸話は、定信の尊大さを物語っているようにも感じられますが、決してそうではなく、八代將軍徳川吉宗の孫として生まれ、將軍家の血筋に対する矜持と、徳川家の繁栄と幕府の存続を人一倍強く願う熱意の現れでした。それほど定信は徳川家への思いが大きく、老中としての覚悟と責任感を如実に示すものでした。

吉祥院歡喜天願文

『天明八年正月二日(中略)』

越中守一命は勿論之事妻子之一命にも奉懸候而、必死に奉心願候事(後略)『(樂翁公傳)より抜粋』

定信の決意はこれにとどまらず、神に誓う形の御心願として残っています。定信が老中に就任した翌春、靈巖島吉祥院の歡喜天にささげた願文です。定信は、凶作のため江戸の町に米が充分に入らず、米価も高値で庶民が難渋している中で、安心して静かに暮らせるようにと願っています。

定信は願いを聞き届けてもらうため、自らの命はもちろん妻子の命をも懸けると誓っています。このことを知った渋沢が、定信を尊敬するようになったと伝えられています。幕府の執政として命を懸ける定信の覚悟に、渋沢は深い感銘を受けたのでしよう。



青年期の渋沢栄一
(渋沢史料館所蔵)

(文・中山義秀記念文学館 館長 植村美洋)

お知らせ

トップス

ラウンジ

手話

高齢者サロン

りぶらん

シリーズ

子育て

保健

くらしの
情報館

休日当番医・
無料相談ほか